

国際貢献とボランティア（幸せのお裾分け）



五月女 光弘
前外務省参与・初代 NGO 担当大使

日本はなぜ国際貢献をすべきなのでしょう、日本だって厳しい経済状況なのに。……よく聞かれる意見ですが……。日本は国際貢献をすべきなのです。

その理由の一つ目は、日本ほど国際社会から貢献を受けた国は他にないからです。

第二次大戦後、疲弊していた日本は、国際社会から大きな支援を受けました。アメリカからは当時の国家予算の4倍もの無償資金援助（ガリオア・エロア基金）を、世界銀行からは東海道新幹線や黒部ダムなどの建設資金を低金利で融資を受けたのです。また国連ユニセフは本来連合国の児童支援の機関でしたが、日独の子供たちを助けることに反対がある中で、ペイト事務局長の、“子供に何の戦争責任があ

るのですか、飢餓に苦しむ子供を助けられないのは文明国家の恥です。”と説得し、国際機関として初めて、大きな無償援助を日独の子供たちに提供してくれたのです。ユニセフは1965年、その人道的活動が評価され、国際機関として初のノーベル平和賞を受賞しました。

更に、国際 NGO である「米国 CARE」のパッケージ物資支援や、NGO 連合体「LARA」によるララ物資は、1500万の日本の子供たちを飢餓から救ったと言われています。その援助規模は当時の日本の国家予算規模のほぼ半分近い大きなものであったのです。CAREの親善大使となった、映画「カサブランカ」や「誰がために鐘は鳴る」で有名な女優イングリッド・バーグマンは、日本の子供たち支援のための募金活動で大きな貢献をしてくれたのでした。（次ページに続く）



ユニセフ親善大使
オードリー・ヘップバーン

巻頭言 製薬企業の社会的責任



PHJ理事
竹中 登一
アステラス製薬(株)
代表取締役会長

1997年よりプロジェクト HOPE ジャパンはアジア諸国を主な対象とし、現地調査活動に基いたニーズの高い保健・医療支援活動を幅広く積み重ねられ、2006年からはピープルズ・ホープ・ジャパン (PHJ) として新たなスタートを切られました。日本製薬団体連合会 (日薬連) は1997年1月より歴代の会長が理事をお引き受けしており、私で6人目になります。

この間、日薬連としては微力ながら、タイにおける小児心臓病手術資金、インドネシアにおける肝炎診断技術教育資金などのご提供を行なってきており、また今年度からはアジア途上国への医療活動全般を支援させていただくことになりました。日薬連として永年 HOPE ジャパンの活動にご協力できたことは大変光栄に存じております。

HOPE ジャパンを安心して支援できる背景には、スタッフの熱心さ、ひた向きさがあります。代表や理事長、また運営委員の皆さんはもとより、現地に駐在しているスタッフの皆さんの熱心さには頭が下がる思いです。厳しい

自然や生活環境の中で地域の皆さんと共に生活し、同じ目線で医療課題に取り組むことが支援者の資金を確実に成果に結びつける重要な要素であると感じています。

国際社会は現在、ミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals: MDGs) の達成に向けて取り組んでいます。これは、人間を中心に据えた期限付き (2015年) の具体的な目標であることや、幅広い国際社会が承認していることなどが画期的なことであると言われていています。達成期限の半ばを過ぎ広い地域で明確な成果が現れ始めてはいますが、2015年までに目標を達成させる為には更なる努力が必要と報告されています。

この目標の達成責任は誰にあるのでしょうか？勿論、国家の役割も大きいでしょうが個々の企業や業界団体の役割も非常に大きいと考えています。CSR活動は個々の企業の能力や環境に応じて主体的に取り組むことが大切ですが、製薬企業としては是非前向きに考えたいものです。MDGsに掲げられた8つのGoalsの内、乳幼児死亡率の削減 (Goal 4)、妊産婦の健康の改善 (Goal 5)、HIV/エイズ・マラリア・その他疾病の蔓延防止 (Goal 6) は、まさに PHJ の活動に密接に関係しており、MDGsの達成に直接貢献するものと考えております。

PHJの益々のご活躍をお祈りすると共に、可能な限りご支援を続けて参りたいと考えております。



世界銀行融資により 1964 年に完成した東海道新幹線

その理由二つ目には、国家の安全保障です。仲間の少ない日本は国際社会ではひ弱な国です。同じ敗戦国のドイツはライバルだったフランスと仲良く「EU：ヨーロッパ連合」を創設し通貨まで統合、仲間作りに成功しました。日本は思いやりの心を持って貧困に苦しむ途上諸国を支援し、日本を頼りにし好意をもってくれる国々を沢山作らなければいけません。周りに親しい仲間が増えていくことが、日本の安全を確保することに繋がるのですから。

そして理由三つ目には、ノーブレス・オブリージュ（高貴な人、豊かな人、幸せな人の、弱者・不幸な人を助ける当然の義務）です。困っている人、苦しんでいる人を助けるときに、なぜ助けるの？と理屈を言うてはいけません。日本は苦しくなったと言っても途上国から見れば百倍も豊かな国なのです。飢餓に苦しむ国々を助けなかったら“国の品位”を疑われるのです。戦後アフリカで最初の独立国となったガーナ共和国の、当時の国民一人当たりのGNPより、日本のそれの方が低かったのです。その貧しく苦しい時に世界の NGO や国際機関が助けてくれたのでした。今アジア・アフリカに、半世紀前の貧しかった日本の姿を見ることができなのです。今度は日本が国際社会に恩返しをする番なのです。

ところで、戦後最初に日本を助けてくれた国連機関のユニセフに関わるお話しです。



ケア親善大使イングリッド・バーグマン
(1949 年アメリカ)

そのユニセフで後に親善大使として活躍した女性がオードリー・ヘップバーンでした。オードリーは 1988 年 59 歳のとき女優をやめて、請われてユニセフ親善大使に就任しました。無給ボランティアでは正式職員にはなれないので、年俸 1 ドルで契約、しかし年間百万ドルを自ら支出し世界の子供たちを支援続けたのでした。しかし 1993 年 1 月、アフリカのソマリアで重い病に倒れ、帰らぬ人となったのです。

なぜ、オードリーは体力的にもつらくて厳しいユニセフの仕事を引き受けたのでしょうか。晩年、親しい友達がその理由を聞いたとき、オードリーは、次のように語っています。

“私は戦時中の少女時代にナチスドイツへのレジスタンス運動に参加して、死を覚悟するような状況にも追い込まれました。でも誰かが私を助けてくれたのです。お陰で生き延びることが出来、戦後ロンドンに渡りマリー・ランバート・バレー学校でバレリーナを目指していた時に、ハリウッドからきたウィリアム・ワイラー監督にスカウトされて映画女優になりました。そして主演した「ローマの休日」や「ティファニーで朝食を」などが大ヒットし、世界中の皆さんから愛され豊かな人生を得ることが出来たのです。でももう女優を続けるつもりはありません。最後に自分の遣り残した仕事、戦争や貧困に苦しむ子供たちを助ける仕事をしたかったのです。私はもう充分幸せです。私はその幸せの一部をちょっとだけお裾分けしたかっただけなのです。”

(元・駐ザンビア大使、駐マラウイ大使、在オークランド総領事、早稲田大学・聖心女子大学・立教大学大学院兼任講師、著書に「アメリカ合衆国読本」「日本の国際ボランティア」「シニアのための国際協力入門」など多数、1995 年文藝春秋ベスト・エッセイスト)



ケアパッケージを受け取る子どもたち
(1948 年日本)

© CARE

インドネシア バンタン州での活動状況

「母子健康地域保健医療システム強化」のバンタン州での活動状況を視察してきました。

場所は、テルタヤサ自治区アランアラン村のケパクサン集落。海に近いので、養殖池が広がり、風に潮の匂いが混じります。雨期明けの青空の下、村の助産師宿舎の庭に、20名程の妊婦さんが集まっています。

今日は、定例の妊婦健診の日です。この妊婦健診の機会を利用して、健診前に保健教育が行われました。自治区の保健センター助産師の監督の下、村の助産師たちが、妊娠中の健康管理のポイントを、言葉だけでなく、視覚教材を使い、時には動作を交えて、妊婦さん達に保健教育を上手に行っていました。内容は、妊婦健診の大切さはもとより、妊娠中の危険なサイン等です。妊娠期間を快適に過ごし、スムーズな出産を促すための妊婦体操では、妊婦さん達に、実際に体を動かしてもらい体感してもらい

ました。そして、保健教育の終わりには、参加した妊婦さん達に前に出て発表してもらうなど、習得した知識の確認も行なっていました。

この保健教育は、既に定番のカリキュラムとして確立しているようで、村の助産師たちの間で役割分担が明確になっており、スムーズに行なわれました。PHJは、このような地道な活動を通し、地域の母子保健の改善を目指しています。今後とも、皆さまのご支援を宜しくお願いいたします。（石関）



健診の前に保健教育



参加した妊婦は前に出て発表

カンボジア活動報告 歩行補助具を寄付

カンボジアのリハビリセンターと病院に新品の歩行補助具260台を寄付しました。

寄付のきっかけは一昨年暮れにPHJのホームページを見たと言う一本の電話でした。

自らが脚に障害を持つ健康器具メーカーの社長様が考案した歩行補助具をカンボジアに寄付したいという、ご子息からの依頼でした。既に社長様は亡くなられたが父の生前からの希望であったとのことでした。

この話はカンボジア事務所を通して社会福祉省リハビリ局に伝えたと、早速全国のリハビリセンター

で使いたいとの熱い要望がありました。

カンボジアは道路整備が大変遅れており、バイクによる交通事故や農作業中の怪我、また時には地雷によって手足を失くしたりした人々は不便な日常生活を送っております。

日本製の使い易い歩行補助具は困っている人々へのすばらしいプレゼントになります。

4月30日、社会福祉省での寄贈式典には中央政府機関、在カンボジア日本大使館そして全国12ヶ所から各センター長が出席しました。

歩行補助具は寄付した後も長く使ってほしいので、今後は社会福祉省が窓口となり各リハビリセンターは修理の為、部品の在庫管理や職業訓練を行います。

脚が不自由で外に出られなかった子供たちも、この補助具でリハビリ訓練をして一日も早く学校へ行ったり、仲間たちと楽しく遊ぶ日が訪れるのを願っております。

この歩行補助具は235台を全国12ヶ所のリハビリセンターへ、25台はPHJが母子保健改善プログラムを進めておりますコンポントム州の3つの病院に寄付されます。

尚、日本からカンボジアまでの海上輸送は外務省補助金を使わせていただきました。（横尾）



式典模様を伝えるプノンペンの新聞



地方のリハビリセンターに運ばれる寄付品

タイ・子宮頸がん予防教育活動報告

このプロジェクトは、2002年から2006年にかけて、タイ中部の農村地帯、スパンブリ県、チャイヤブーン県で成功しました。その経験に基づき、2007年からはタイ北部、チェンマイ県メタン、メリン地区の貧しい家庭の女性のために、県保健局・地域の病院・保健センターと協力して子宮頸がん予防教育、パップテスト（細胞診）、実態調査を実施しています。

昨年このプロジェクトでは地域住民に対し子宮頸がんとパップテストの重要性を理解してもらう啓蒙活動を行いました。また健康・保健に従事しているスタッフに対して、地域の看護師・保健職員、PHJTスタッフと協力してワークショップを開催し、保健教育とパップテストについてのオリエンテーションも実施しました。

同時に、パップテストの技術を高め、さらに効率的・効果的に実施できるようにするため、地域の看護師・保健センターのスタッフのトレーニングのみならず、地域のヘルスポランテアたちの教育にも力をいれています。教育資材、記録簿、医療器具や補助材をメタン、メリン地域の30の保健センターおよび2箇所の

病院へ提供もしています。

シロラト・シンツボンさんは正看護師でチェンマイ県メタン病院でこのプロジェクトの責任者で、企画チームのメンバーでもあります。以下はシロラトさんからのメッセージです。



シロラト・シンツボンさん
正看護師

「PHJの支援のもとに行われている子宮頸がん予防教育プロジェクトはメタン、メリン地域で成功しています。パップテストの受診率は54%にのぼり2009年度末には60%に達すると予想しています。PHJTのスタッフとはとても友好的な協力関係を築くことができます。ご支援ありがとうございます。」

(ナンハラカモン・カドメッサム 子宮頸がん教育事業担当マネージャー)

会員のひろば

カンボジア

「横河60会小学校への交流・支援活動」

(横河60イカス会世話人 PHJ個人賛助会員) 渡邊 嘉之

横河同期(60イカス会)の有志が定年を記念してカンボジアに小学校「Yokogawa Rokumaru-Kai School」を寄贈して早7目年を迎えました。

毎年60イカス会有志及びご賛同頂ける方々と学校訪問をし「物・心」両面での交流・支援活動を行っています。

60会スクールはアンコール・ワット遺跡の在るシェムリアップ市から南東200km離れた僻地の農村に有り6年過ぎた現在も電気・水道・電話・道路も悪く言葉もクメール語でなかなか意思疎通も図れませんがPHJカンボジアのコンポントム州都の本拠地(学校は18kmの地点)の中田所長さんとローカルスタッフの皆さんが校長先生と連絡を取合って頂き交流支援活動が継続できている次第で大変感謝しております。

昨年は朝食を食べて学校に来れない生徒の為に「炊事場と井戸」を寄贈し、お絵描き教室を開き、その中から'09年度のPHJカレンダーに3点採用され、その生徒や先生・ご家族も大変喜んでおりました。

毎年好評のカレーライス(300食)は新炊事場でお母さん達と一緒に作り



生徒・先生初め全員で食べお代わりも続出でした。

今年のイベントはカンボジアの学校には風習の無い(授業にも体育・音楽が無い)ミニ運動会を企画し紅白ハチマキ・紅白の旗・応援用のグッズ等日本から持込・カンボジアで用意できる竹ざお等は現地にお願しました。

役割分担(体操の先生・進行係から救護班など)綿密に事前準備をしていきました。

前日に運動会の意義やラジオ体操・応援合戦の練習・ライン引き等を実施し、当日は生徒達を紅白に分けラジオ体操・応援合戦・玉入れ・綱引き・徒競走・リレーの4種目の競技を終えラジオ体操で締めくくり、整理・整頓・掃除を教えて、怪我人もせず無事終了できました。

子供達も大喜びでまたカンボジアの子供達の競争心旺盛なのは驚き、我々高齢者も炎天下の中負けじと頑張って良い汗を沢山かきました。

今後ともPHJさんのご協力を頂きながら資金と体力の続く限り60スクールから立派な人材が育つよう交流・支援して参りますので60イカス会の活動にもご支援・ご協力をお願いする次第です。